

99人の父ちゃん

ある里親の愛の記録

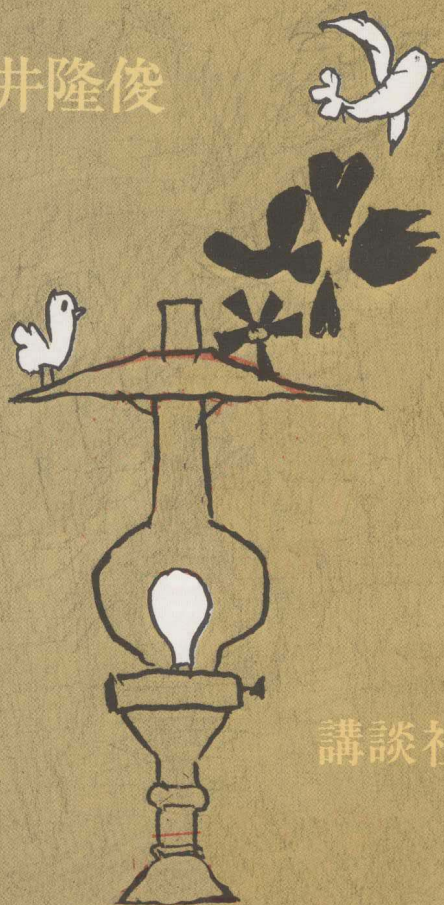
横井隆俊



99人の父ちゃん

—ある里親の愛の記録—

横井隆俊



講談社

99人の父ちゃん
——ある里親の愛の記録——

1973年7月24日 第1刷発行

定価 680円

著者 横井隆俊

発行者 野間省一

発行所 講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 大製株式会社

© 横井隆俊 1973 Printed in Japan



落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0036-266176-2253 (0) (企)

序

「他人様の子をあずかって育てているうちに、いろいろ思いもかけないような子どもを育てる仕儀となり、その一人一人の子のもとである親のありようを知り、その子一人一人が育っていく生き方の指針として、それをさらに深く知ることを心掛けてきた」と云いつつ、横井氏は、この書で十九年間の里親の記録をまとめた。氏は幸手町の法蔵寺住職である。刑務所にいる父親をもつ子や、酒吞みでぐうたら親が家出した子や、捨て子や、あずかった子の環境はさまざまだが、いずれもひとくせもふたくせもある子らである。その子らを、九十人以上も育てて社会に巣立たせた。

読みおえて考えさせられたのは、氏が宗教家であることの意味についてであつた。私たちは、正直、身边に一人や二人のお坊さんの知人をもっているけれど、宗教家といわれる人が、今日ほど私たちとかけはなれて見える日はない。いろいろ本も書き、ありがたい教条を説いてくれる人は多いけれど、黙って実践している坊さまを見ることは少ないのである。私はこの書で、その実践者にめぐりあえた。

氏はここで、抹香くさいことはひとことも語らず、てこずらせながら懸命に生きてゆく子どもらを、慈悲ぶかく抱きとっているだけである。世に里親制度というものがあることを知る人も少なからうが、読者は、この書で、あらためて荒涼たる社会のありようや、人間の魔性について学ぶことも多からう。しかし、心うたれるの

は、横井氏夫妻のつきない泉のような慈悲心である。折角成年にまで養育し、ほっとしていたところへ、子づれの女がやってきて、その男の子をたぶらかして自動車ごと消えてしまう。横井氏は、青年の門出に買ってやった車代の月賦に苦勞する。おまけに女が捨てていった三人の子まで養なうのだ。

先生とよばれる教育者の子や、警官の子もあなかった。しかし、氏は、ここでその親たちに、さして怒りを投げつけてなどいない。まこと、氏の住する法蔵寺は、格子なき感化院であり、子捨て場であり、きらびやかな花も咲かぬ草の実の園とでもいつてよいかもしれぬ。だが、日本でたった一つしかない「寺」なのであった。

私は、嘗て僧籍にあつて、いまは還俗した身である。還俗した十九歳当時、まったく、本書に出てくるような少年たちと同じく、和尚さまを手古ずらせて、京都の街を乞食の子のように浮浪してあるいた日々のことを思い出さずにおれなかった。そうして世の中には、衣をぬぎ捨てた真の坊さまがいるものだということを思い知らされ、この書にめぐりあえたことが嬉しかったのである。

「異常なものとは異常なのだ。異常が異常でないみたいなりあげ方が多くなっている。おどろくべきおどろきを、おどろかなくなつてゆく。おそるべき現象だが、このおそれさえおそれなくなっている。すべてはおとなの責任であり、子供の無智が生ずる異常を、正常にもどす義務がおとなにはある」と、横井氏はいつている。

戦後二十八年のあいだに、如何ように人間が人間同志で崩壊しつくしてきたかをわれわれは思い知らされる。だが、横井氏は、いのちあるかぎり、この救いなき人間どもが破りまくる秩序のはころびを、黙って静かに繕つてゆこうと決意している。

感銘ふかきものをおぼえて、敢えて求められるままに拙ない序文を草する所以である。

昭和四十八年七月二日

水上 勉

目次

序

水上勉

1

清次、お前またやったんかい

うちしか帰る家のない子だ！

天井裏のネズミ

わるい癖が出だした

せつかくの就職口なのに

もう仕方がない！

2

それでも人の子の親なのか

欠陥だらけの親たち

引き取りに来た父を逃げる子

母ちゃんグチこぼしに来るのか

腹を痛めた子じゃないか

“もういまは関係ない”

3

この子らに罪があらうか

山中をさまよう幼い女兒

温泉の夢が寝小便とは！

50

48

43

39

36

33

28

22

19

16

13

10

盗み食いで保護されて.....	52
あわれこの精薄の子たち.....	54
この蒙古症の子のゆくすえ.....	56
この無責任な親たち.....	

あきれはてた母親.....	62
おがみやカアチャン蒸発す.....	64
“子連れ女狼”の悪.....	67
信州から来た“子連れ”.....	69
離婚と再婚の谷間で.....	73
この薄幸と非情との間.....	

ゆくえ不明というけれど.....	80
薄幸から立ちあがる母親もいる.....	84
警察官の父とその子の場合.....	88
料理屋の女中の子の場合.....	92
ある女四代ばなしの異常性.....	95
親はなくても子は育つ.....	
“ありがとう”と言える子に.....	100
仏さまに掌を合わそう.....	103

7

好き嫌いなくもりもり食べよう……………	107
お行儀をよくしよう……………	111
みんなで力を合わせよう……………	114
なぜ里親になったのか……………	

8

私の子どものころ……………	120
芝中学のいいタマたち……………	123
酒もおぼえ女も知って……………	128
結婚して落ち着いた……………	131
洪水とドザエモンと……………	135
父の死・母の死……………	137
里親になった動機……………	142
幸手というところ……………	146
灯が消えたような……………	
東北の我慢づよい女……………	150
感謝状も賞も家内のものだ……………	152
里子第一号の結婚と初孫と……………	157
ブレハブの子ども部屋は建ったが……………	160

灯が消えたような……………163

9 さあ、きょうは遠足だ！

“鐘の鳴る丘”・「少年の家」へ……………170

ニジマスを食べに……………176

性教育はズバリとやる……………182

10 おおきな夢を

おおきな夢を……………188

高度福祉というけれど……………197

夢をそだててくださる人びと……………207

吉川英治賞をいただいて……………221

口絵
写真

服部 邦雄

装丁
カッ

鈴木 義治

99人の父ちゃん

—ある里親の愛の記録—

1

清次、
お前またやっ
たんかい



うちしか帰る家のない子だ！

朝の五時起きは毎度のことで、ちっとも苦にはならないのだが、この日ばかりは、なんとしても気が重かった。なにか重たいものが肩にのしかかっているようで、かつたるい暗い気分だ。きのう幸手町の弟にたのんで、車に乗せてもらって行くことにしたのも、ころよく承知してはくれたものの、いい話で出掛けて行くのではないだけに気がひけてたまらなかった。思い切って電話で断わって一人で電車に乗って行くか、とも考えてみたのだが、なんとなくずるずると、朝が来てしまった。こんなことで家業が忙しいはずの弟に迷惑をかけて相済まんことだと、起きて歯を磨きながらまた思った。

三月に入ってから減法冷える。

早々に弟が迎えに来てくれて、車に乗り込んで、じゃたのむよ、と寺を出たのは午前六時すこし前で、まだ関東平野はほの暗かった。土地ブームで野良仕事をする者がすっかり姿を消してしまった田畑がうそ寒いばかりに冷えびえとひろがっている。

大利根の土堤に接する埼玉のはずれから、東京のド真んなかを突っ切って横浜まで走り続けるのだ。かつてないことだが、私も年のせいかな、ついおっくうになってたのんでしまった。すまないな、ご苦労さん、としきりに思う。まして、埼玉のここらへんなら走り慣れていても、東京、川

うちしか帰る家のない子だ！

崎、横浜と大都市のすさまじいばかりな車の洪水のようなかを走るとなると、めったに行つたことがないだけにきつい。せめて早いうちなら空いてるかも知れないな、と素人考^{しらべ}えで早朝を選んだのだが、浦和を過ぎるころから誤算とわかつた。川口から赤羽^{あかばね}へ、荒川^{あらかゐ}の橋にさしかかるあたりで早くも数珠^{じゆず}つなぎになつた。

「なるほど、ラッシュだな、ひでえもんだねえ」。

と運転する弟はうなつた。私は、戦争の末期まだ東京で働いていたが、どうにもならなくなつて親もとへ荷物をまとめて帰つたころのことを思い出した。あのころとはまったくちがうものすごい車の混雑ぶりだ。あのころの、戦争から逃げ出して行くという恰好じゃなくて、こんどは、経済成長に遅れまいとしてわれもわれもと大都市へ急ぐのだ。ここにはまったく思いもなかった別の戦場がくりひろげられているのだ。どうにかならんもんかねえ、と口に出かかったことばさえ、嘆きのことばとしての響きを失つてしまつていると思えて、口をつぐむ。しかし、こういう図こそいわゆるエコノミックアニマルといわれる一面を絵にかいたようなものなんだな、とも思う。そんな思いのあとからあとから、

「清次^{せいじ}のやつ、またやつたんかい、どうしようもない野郎だな、お前は……」

と、頭にこびりついたものがしつこく離れようとしなかった。

清次はかわいそうな男なのだ、といつてしまえばそれに尽きる。けれども、

“そんなやつ、どうにかなっちゃえばいいじゃないか”

と捨て鉢な気持ちが始まるそのつぎから、

“だが、おれが育てた子なんだぞ”

と、太い、きびしい、どすぐろい声が、私のなかでむし返されてくるのだ。

“やつは、おれのどこしか帰るところがないんだよ”

とも思う。このどうしようもない自問自答は、だれにもわかつちやもらえないことだ。これが愛情というものなのか。

＊

大木清次は昭和三十二年一月五日生まれ、私のところに里子として引き取ったのは、四十二年五月だった。

ちょうど十歳だった。寝小便たれだが、無邪気でかわいかった。女房も気に入ってかわいがった。すぐ近くの行幸みゆき小学校へ入れたのだが、知能指数八五ぐらい、いくらか精薄しやうはくぎみで成績はわるかった。それが一、二年するうちにだんだんよくなった。すこしずつよくなるという面では、私のところでそれまでにあなかった子ではもっともいいほうだった。

“こいつ、よくなるかも知れねえぞ”

と私のなかで期待がわいたのもこの子だ。

たくさんの子のなかには、いろいろな子がいるものだ。どうしようもないな、と思いながら見てみると、どこかにいいところがあらわれてくる。どんな子どもでも、よくよく見てみると、いつかその子のなかにいいところ、いいものが芽を吹きはじめてくるのが、こちらに見えてくるのだ。だめだと思う子にかぎって目をかけて見ているから、ハッとおどろくような一面がのぞける。そうか、いいところあるじゃねえか、よし、とばかりに、こちらもその子のいい一面を伸ばしてやりたいと思うようになる。

清次が目に見えて学校へ行くのが好きになり、おのずと成績がよくなりだしたところは、

“こいつ、もう大丈夫だぞ”

とさえ私は思ったものだった。

天井裏のネズミ

私のところへ来たのが十歳だったのだから、ちょうど子どもの年齢としてだいじなころを私のところで過ごしたわけである。だいたい、三〜四歳ごろと十〜十一歳ごろが、子どもにとってもっともデリケートなだいじな年齢だと私は考える。なにかが目覚め、なにかが芽ばえ、そして育つころなのだ。

清次のやつ、よくなったな、と思ったとたんに、私はだまされてしまった。どんでんがえしを食

った。寝小便たれのくせはなおってはいなかった。これはどうしようもない。結局は中学二年ごろまでやりっぱなしだった。

寝小便は叱ってなおるものではない。だがあるとき、清次がうそをつくのを知った。これはこっぴどく叱らなければならない。私はどやしつけた。すると、めそめそ泣きだしたと思っているうちにどこかへ消えて行って食事にもどって来ない。どこへ行ったんかとさがしていると、本堂の天井で音がする。見るとそこに清次がいた。あきれた天井裏のネズミだ。それらしい、癖になったらしく、叱られそうだとわかると、天井裏へあがってしまう。押し黙って食事もとらずに、ネズミの泣き寝入りならぬタヌキ寝入りをきめこんでふてくされる。

これにはほんとうに困ってしまった。私は人間が甘すぎるのかも知れない。いままで何十人と里子を育ててきたが、思えば、だまされすかされるほうが多いのだ。いいことにたいしてほめるときには大いにほめる。が、よくないことにたいして叱るときにはこっぴどく叱る。しめしがつかないからだ。

まことに、子どもの教育くらいむずかしいものはない。いのちがけの体当たりだ。まして、里子に出されるような運命を担わされてしまった子どもというのは、一様いちようになんらかの重荷を背負っている。その重荷をいくらかでも、すこしでも軽くしてやれたら、と思うから、私は里親をみずから買ってでて続けてきた。それなのに、ついに里親は里親か。どうあがいても実じの親にはなれないの